

13 月 太 陽 の 国

①

村下敏夫

「拝啓 こちらでの生活がはじめてから14日目です。先生方からいろいろとお話を伺ったりお世話になったことを身に感じつつも とてものどかで楽しい毎日です。アジスは本当に古さと新しい動きとの混った興味ある町ですね。 2日後は全学生の政府に対するデモが行なわれるそうです。 エフレムからくれぐれもよろしくと申しております。」——かわいい日本の女性からバハールダルにある 青ナイル滝の美しい絵葉書をもらったのは 3月上旬のことであった。 彼女は2月中旬に 愛するエチオピアの青年が送ってきたBOACの航空券を受け取るやいなや まぶたにえがいた太陽の国と2ヵ月半ぶりに会う恋人のところへ飛び立った。 このたよりを手にするまでは 生活 習慣 宗教のまったく異なる国へ 予備知識もなく乗りこんで しかも21才という若さではたして耐えきれぬかと案じたり あるいはその若さがすべての困難を克服するのかもしれないと考えたりしていた。 ほかに人への便りからも 今までの心配がとりこし苦勞のように思われたが 先方での生活になれるにつれて新しい悩みがつきつぎに生れてくるのではないかと この便りを読み返すごとに心配になってくる。

アへ行ったのは 地下水調査と その技術指導という目的であった。 地下水関係の仕事は これが2回目であった。 最初は昭和41年で このときは「エチオピアさく井企業進出調査」の目的で 日本鑿業探鉱KKの吉武長栄部長を団長とする一行が約40日間にわたって渡エした。 その経緯があって 先方から「日本国政府による技術援助計画」に基づいて地下水専門家の派遣方を申請してきた。 そして42年の第2次調査団の団長は 前回の団員であった地質調査所の蔵田延男部長（元応用地質部）で われわれ4名の団員の中の2名は 前回の経験者という構成であった。

ところで エチオピアについての私の知識は いたって心細いものであった。 子供の頃に エチオピア戦争があったこと 黒田家とエチオピア皇族との間に御縁談があったこと 1956年にエチオピア皇帝が国賓として来日されたこと 59年には同国の皇太子と皇太子妃が来日され 翌年にわが国の皇太子と皇太子妃が 天皇陛下の御名代としてエチオピア国を訪問されたこと 最近では東京オリンピックでアベベ ビキラ選手が大活躍したこと程度にすぎなかった。 なお昨年のメキシコオリンピックでは マモ ウオルデ選手がアベベに代わってマラソンで優勝し 高地民族の強さを世界中に示したことは日本人の記憶にも残っている。 また多数民族 種族が一国家を形成したときの悲惨な対立 内戦の様相は アフリカ西海岸のナイジェリアで知られているし 日本のテレビは「世界の王様」 「大サワラ」などの番組でアフリカの一面を紹介しているから エチオピアは 少しずつながらも 日本人に理解されつつある。

これから紹介することは 現地における地下水調査ならびに地下水開発の技術指導と それを通じて見聞したエチオピアの国と人である。 わずか2ヵ月間の滞在でしかも狭い視野からでは 歴史あるエチオピアの国と誇り高い民族をよく表現することはできないであろう。 もし間違っている点があったら お許しいただきたいと思う。 また本文を通じて日本から1万2,000kmも離れた東アフリカの一角に エチオピアという国があって日本人が忘れかけている「愛国心」にもえている民族がいることを知っていただければ 一層幸いである。

アフリカのスイスともいわれる高原と湖の国エチオピア

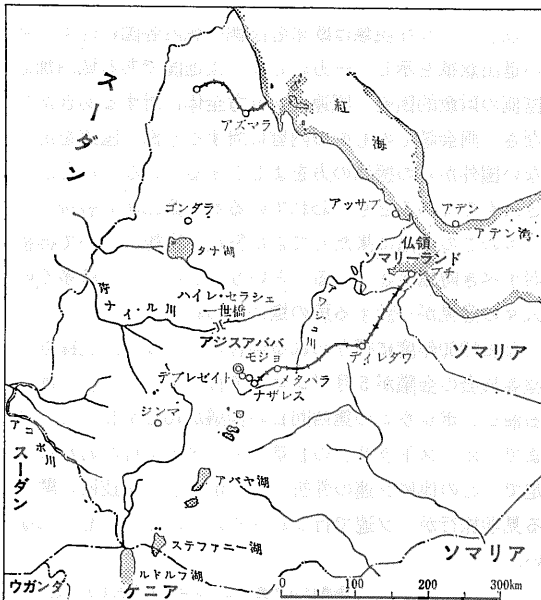


図1 エチオピア国内略図

エチオピア人に日本のことを尋ねてみても はっきりした答えがえられないように 日本人もまたエチオピアについての知識は乏しい。そこで 最初にエチオピアの歴史や自然 社会について少し紹介したい。資料は昨年(1986)の3月19日から28日までの間 ジェトロで開かれた「エチオピア展」にもと拠っている。

エチオピアは イスラエルの王ダビデの子で古代史上に有名なソロモン王(在位紀元前971~932 平和の君とも称せられる)とシバの女王との間に生れたメネリックI世以来の王国で 皇統連綿3000年の歴史を誇り アフリカで唯一の最古の独立を保った国である。ただ今世紀に5年間(1936~1941)だけ イタリアに占領されたことがある。

ソロモン王とシバの女王との恋物語は有名で 女王が王をたずねて海をわたり 王に謁見し 女王のあまりの美しさに王の心が動き やがて二人の間に芽ばえる愛の物語は 神話のように語り伝えられ エチオピア人はその子孫であることに大きな誇りを抱いている。その後のおもな歴史は 次のとおりである。

- BC 950年 メネリックI世即位
- AC 1世紀 アクスム王国として栄える
- 3世紀 キリスト教入る
- 15世紀 ポルトガル人の来訪により ヨーロッパにその存在が知られる
- 1895~96年 第1回エチオピア戦争
- 1930年 現皇帝ハイレ・セラシエI世即位
- 1935~36年 第2回エチオピア戦争 イタリアに侵略される
- 1941年 英軍の手でイタリアを駆逐
- 1942年 英国との協定により独立主権国となる
- 1952年 旧イタリア領のエリトリアがエチオピアの自治連邦国となる

また 国の面積 人口 人種は 次のとおりである。

- 面積 118万4,000km² (エリトリアを含む)
- 日本の約3.2倍
- 人口 2,300万人 (1966年国連推計)
- 首都アジスアババ 44万9,000人
- 人種 アムハラ族33% ガラ族43% その他24%

アムハラ族は 皇帝ハイレ・セラシエI世を宗主とする支配民族であり ガラ族はエチオピア本来の土着民族で 皇后はここのご出身であった。その他の民族にはチグレ族 ソマリ族などがある。

エチオピアの旧名は アビシニアである。アビシニアは「混り合ったもの」という意味

エチオピアは「黒い肌」という意味である。エチオピアは 紅海をへだててアラビア半島と接しており シバの女王とともに イスラエルから大勢の人達が移住したとも言われている。これらの民族と土着民族との血が混り また7世紀には回教徒がこの国を侵略したことがあったことなどを合わせ考えると アビシニア エチオピアの意味がおぼろげながら理解できる。

エチオピアの広大な土地は そのほぼ中央を北から南にはしる峡谷帯(リフト バリー)によって分断された高台で 西に中央高台 東に東部高台があって向かい合い これらの高台が全土の $\frac{2}{3}$ を占めている。高台はアビシニア高原とも呼ばれ 4,620mのラスダシャン山を筆頭とする十余の高い火山があるが だいたい2,000~2,500mのテーブル状をなしている。テーブル状の高台には 噴火口が集中して存在する地帯があり 遠くからみると女性のオッパイのような形でまことに美しい。中にはカルデラ湖があり 週末の保養地になっているところもある。地形図に噴火口やそれから流れ出た溶岩の分布まで精細によく示したのがある。失礼かも知れないが よくもそこまで記載できるものだと感心していたら 帰国の途上アズマラから紅海沿いに南下したとき 眼下に噴火口があり 夕日で赤く映える砂漠に黒々とした溶岩流が喰いこむように——俗な表現をすれば傷あとのカサブタのようにしがみついている様子が あざやかに眺められた。これは アラビア半島の紅海沿いにもあった。なお紅海沿いの一部には Black area と呼ばれる低地がある。そこには砂漠を通して浸透したのであろうか塩水湖があり その周囲は塩で白く輝いていた。この湖のもっとも深いところは 海水準下130m 近くも



図2 エチオピア人は目鼻立ちが美しい

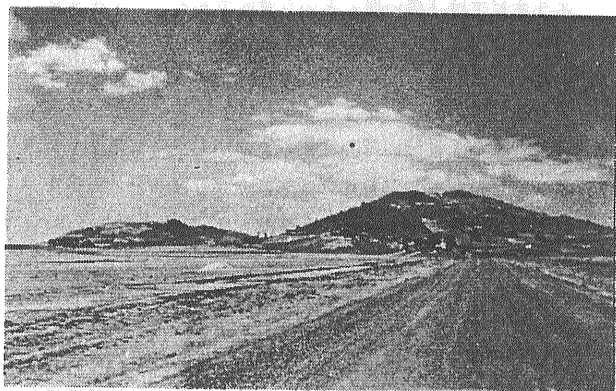


図3 前方の山は富士山と同じ高さの Mt. Safale 山頂まで耕されている。道路の標高は3,000m (青ナイル川に向かう途中)

あるという。この Black area のかなたに 一つだけ活火山が見えた。それは 麦秋の野にたなびく野火の煙のように 白く尾をひいていた。

峡谷帯は アデン湾の陥没 紅海の形成と関係があるといわれる大きな構造運動によって形成されたものである。峡谷帯には 西の中央高台に源を發し 仏領ソマリランドとの国境付近の砂漠で蒸発するアワシュ川があつて 北東に向かって流れ また南西にはズワイ ランガノ アバアなどの湖が連なり 国境を越えるとアフリカ随一の名湖ビクトリア湖がある。エチオピア国内の湖には淡水湖と塩水湖とがあり 湖は鳥の樂園ともいわれるほど自然美にあふれている。ナザレスから南へ20kmぐらいいったアワシュ川のほとりに 自然湧出のソデレという温泉地がある。プールあり バンガローありで 老若男女がぬげるような青空の下で重い空気を胸一杯に吸っていた。ブーゲンビリアの花に囲まれたプール脇の木立には人なつこい猿が枝から枝へと渡っていた。標高が1,000m 弱の低い川のそばであるから ワニの危険から身を守るために鉄製のサクがあるのが なんとなく奇妙に感じられた。

アビシニア高原は アワシュ川 青ナイル川 その他の河川によって深く刻まれている。谷の深さは1,000mあるいはそれ以上もある。この深い谷が交通 文化の交流を阻害し 単一の高原ごとに独自の生活環境が形成された。キリスト教徒が回教徒に追われてアビシニア高原に逃げ独特の宗教を守ってきたのも 植民地政策の旺盛だったヨーロッパの国々からの侵略を防ぎえたのも アビシニア高原独特の地形のおかげであろう。

気候は高度差によって 1,600m 以下で年平均気温24℃の熱帯地帯 1,600~2,400mで年平均気温18℃の温帯地帯 2,400m 以上で年平均気温13℃の寒冷地帯に分け

られる。各気候帯とも 一般に四季の変化は少なく 雨季と乾季にわかれる。1887年メネリックII世によって建設され そして遠くオーストラリアから移植させた緑と香の濃いユーカリの林に恵まれた首都アジス アババは 北に3,000m級の屏風の山をもつ南向きの高地で市街地は標高2,400m程度である。北緯9度であるが1966年の気象観測記録によると 5~9月の月別気温は最低8.9℃(9月) 最高21.9℃(6月)の日もあったが全体として15.2~13.1℃と涼しい。首都が雨季に入るのは5~6月からで 約4ヵ月間つづく。66年の降水記録では 5月から雨季で10月までの間の降水量が全体の84%を占めており 5~9月の合計雨量は992.8mm 8月が307.6mmと最も多かつた。長期観測記録でも 3月と4月にそれぞれ50~100mm 6月と10月に100~200mm 7月に200~300mm 8月に300~400mmの雨が降る。

雨季のしゅう雨はすごいらしく エチオピアの北部では 落雷による死亡率が第2位を占めているという。また赤道に近いとはいえ 標高2,400mの高地で太陽が出ないともすごく寒いらしい。滞在中の12月の下旬には霜がおりたし ある人の経験では4月の初めにあられまじりの雪が降ったともいう。太陽が出ている時でさえこのように日本の晩秋なみの涼しさであるから 雲に覆われた雨季の寒さは想像にかたくない。

四季の変化は少ないが 一日の気温は日本の四季のように変わる。持参した湿度計付きの温度計は 12月の初めに標高2,000mの裸地で15時に気温27℃ 湿度18%を示したが 17時をすぎると気温はぐんぐん低下して15℃前後になり湿度の方も30%程度に上がった。アジスアババでは朝方には気温が0℃近くになることもしばしばあつて ホテルの一室でも毛布一枚だけでは寒いので

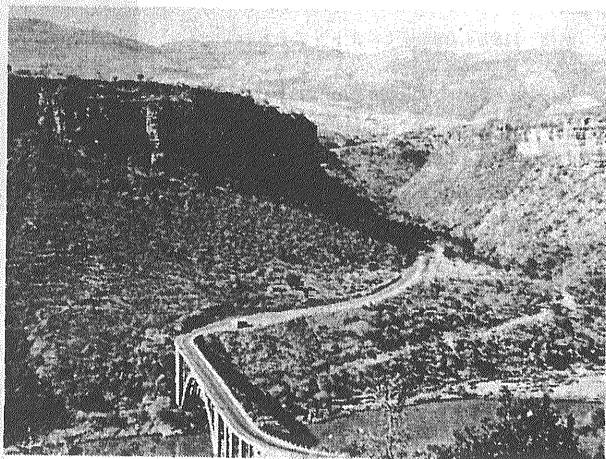


図4 青ナイル川と青ナイル橋。標高2,600mの高台から川までは一気に1,400mもかけおろる。高台は涼しいが 青ナイルのほとりは 焼くような暑さだ

もう一枚頼んだ調査員もいた。私は寒さを防ぐためにパスを使ったあと湯気を部屋中に充満させて窓ガラスを濡めさせた。そのおかげか朝6時の室内の気温は13~15℃湿度は50%台に保つことができた。

雨季を過ぎて2~3カ月たつと日中の湿度がうんと下がって気温が一日で大きく変動するから風邪をひくエチオピア人が多くなった。土間にベットを置いただけの生活であつたらとくにひきやすいと思う。ホテルの庭にあるバナナの葉も次第に枯れて見にくい姿になりブーゲンビリアの花もバラの花も色あせて散つていった。

太陽のある季節でも夜の冷え込みが大きいから首都あるいはその近郊都市では木炭がよく売れる。炭一俵が首都で1,500円もする。雨季には炭火や薪で暖をとる。金持ちは週末になると陰気臭い首都をさけて100kmほど離れた南の低地でまだ雨季に入らない別荘地へ逃げだしあわせて酸素の多い空気を存分に吸って体力の回復を図る。酸素の量は2,400mもの高地になると平地の1/3程度となっているから日本人が避暑と称して山へ登るのは反対にこの国では保養のために少しでも低いところへ行く。また雨季は穀物の収穫がないし疫病が流行するのでもっとも非衛生的な時季らしい。

なお首都の四季を月で表わすと11~1月が春2~4月が夏5~7月が秋8~10月が冬にあたる。

エチオピアの主要農産物はコーヒーで有名なモカコーヒーと同じ品質のよいものである。多くの人はコーヒーは南米の産物だと思っているらしいが実はエチオピアが原産地で豊富に野生している。コーヒーの名は南部州のカファ県に由来するといわれている。9世紀頃まではエチオピア人だけの飲み物であつた。それが

ブンナーという白人の兄弟によって発見されたという。エチオピア人はコーヒーのことをブンナとよぶ。そしてコーヒーはアラビアへ伝わりヨーロッパとアジアへそしてアメリカ大陸へと伝わっていったという。コーヒーはカップ一杯10~15円と安い。バーには花売り娘ならぬコーヒー娘がやってきて注文に応じてまずコーヒーの豆を炒りそれから炭火で沸かしてくれる。

宗教は国教がコプト派キリスト教で政治経済社会文化に大きな勢力をもっている。政治目的に使われたり公の秩序に反しないかぎり他の宗教を信仰する自由は認められている。日本でも宗教の自由は認められているが戒律は僧侶に限られている。しかしキリスト教徒や回教徒は教徒としての戒律がきびしい。したがって諸行事が公の場に持ちこまれてたいへんな迷惑をこうむることがある。たとえば滞在中の42年12月は回教徒の断食で後半に入ると疲れがひどくなって仕事の能率が低下した。断食があけるとそのお祝いで彼らには祭日があつた。コプト派のクリスマスイブは1月6日元日は9月11日で閏年は12日年号は西暦より7年から8年おくらせている。西暦1969年9月11日はエチオピア暦では1962年1月1日にあたる。これはキリストの誕生日に関するローマ教とエチオピア教との解釈の相違から生じたものだという。

日本でのメデタイ忘年会と新年会とをアフリカ大陸で盛大にやろうという楽しみはみごとに水の泡となった。元日に仕事に出かける団員もあつた。日本国大使館での新年のお祝いでは青空にひらめく日の丸と君が代に感激したが正月らしい気分は一年後まで持ちこした。

したがって宗教ごとにお祝いの日が違ううえに他の

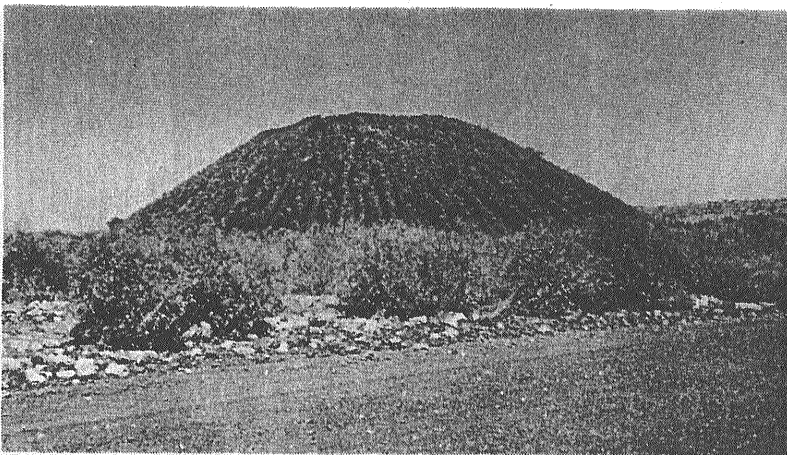


図5 メタハラ近くの峠に多い噴火口 路面から頂上までの高さは10mたらずである

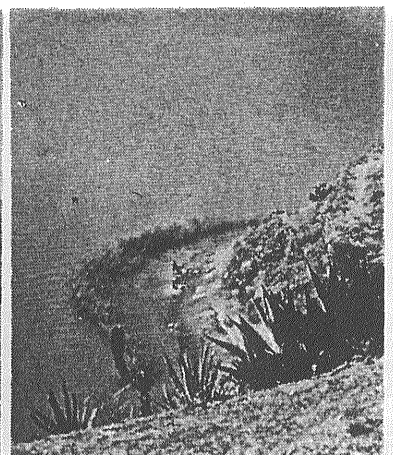


図6 アジス アババから50km南東にある保養地デブレゼイトの町には美しいカルデラ湖がいくつかある。これはビショフツ湖で湖面までは30mほどおりなければならぬ

宗教のことはお互に知らないので 第三者へたとえば調査日程の限られているわれわれは まったく当惑してしまふ。 予定していた自動車は回教徒の祭日で運転者が休んで動かないこと しかもそのことが判るのが当日の屋前であったり コプト派の祭りで官公庁がお休みになることを前日まで回教徒が知らなかったということはたびたびで ちょっと意外な感じであった。

エチオピア暦での1年は13カ月で 一年を30日ずつの12カ月と残りの5日または6日を1カ月としている。 また一日の時間は日の出から数えるから 午前7時が1時にあたる。 この辺の事情がのみこめないと 彼女とのデートもとんだ結末になりかねない。 結婚も異宗間では どちらかが改宗しなければならぬらしい。 こうした宗教上の不自由さを考えるとき 日本の有難さと日本人の偉大さとしみじみと感じる。 ただ便利だと思ふことは 結婚しても姓名が変わらないことである。 エチオピアでの名前の付け方は 子供の名前の後に父親の名前がつくようになる。 マモ ウォルデのマモが名前で ウォルデは父親の名前である。 普通は本人の名前しか呼ばないから Father name はあまり知られていない。 だから 彼らが外国へ出たとき 航空会社の搭乗名簿に Father name を書いたばかりに出迎えの人がまどついたり いつも呼ばれている名前を呼んでくれないのでとまどったりする。 孫になると祖父の名前は消えてしまう。 しかし何代目かには Father name がもどってくるらしい。 こういう習慣は 姓の起源を調べるうえで興味がある。 姓が誕生したのは ローマ時代だといわれているが 古いキリスト教の信仰ともあわせ考えると エチオピアの文明はアビシニア高原によってかたくなに守り続けられてきたことが理解される。 退屈な一時を過すのに欲しい放送は 国営放送とメソ

ジスト派の放送そしてテレビである。 ラジオは 朝 星 夜の限られた時間で 22時過ぎると終了する。 国境を接しているソマリア スーダン ケニヤと仲良くやっぺいこうという主旨のものが コマーシャル放送のように入り またときどき日本の音楽も流れる。 メソジスト派の放送は 広島 長崎の原爆被害を紹介して 原爆禁止のアピールを行なっていた。 テレビは 日本のように一日中放送しているのではなく たとえば67年12月7日(木)のプログラムは 次のとおりであった。

10時30分～12時40分	学校放送
20時 ～20時15分	アムハラ語ニュース
20時15分～22時10分	放送
22時10分～22時25分	英語ニュース

滞在中 夜の番組で 日本で紹介されたい。 とくに雪とスキーの魅力にとりつかれた人がいて ジープをスキーにみだてて運転してわれわれを慌てさせたことがあった。 エチオピアでは 第1公用語がアムハラ語で 第2公用語が英語である。 英語は 小学校3年から必須科目になるらしい。 40才をすぎた大人達は英語に弱いが 子供達は強く 農村へ行っても「お前は英語が話せるか」と近づいてきた。 種族が多いので 第2公用語が必要なのであろうが 彼らは日本人が一民族でしかも日本語だけであることに驚いていた。

首都アジス アババの町で われわれ旅行者を慰めてくれるのは ドンキー(ロバ)である。 日本では 人をのしって馬鹿という。 エチオピアでは 同じ意味がドンキーである。 ドンキーは じつによく働く。 重い荷物 石でも薪でもいとわずに黙々と飼主のムチにじごかれながら 日差しの強い道を歩いている。 主人が道端で長話しに興じているときでも じつと立ったま

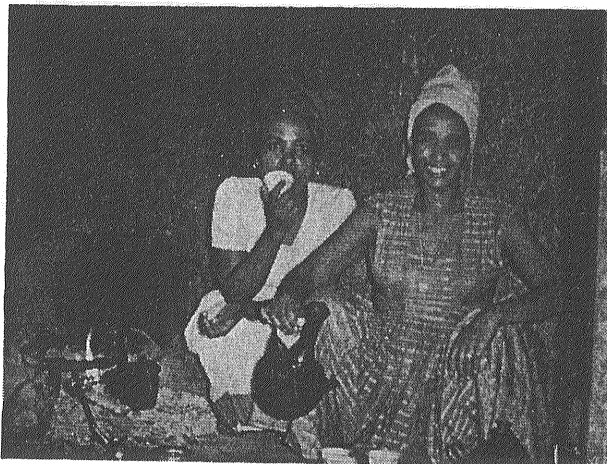


図7 コーヒーを注文すると 豆を炒る最初のことからやってくる

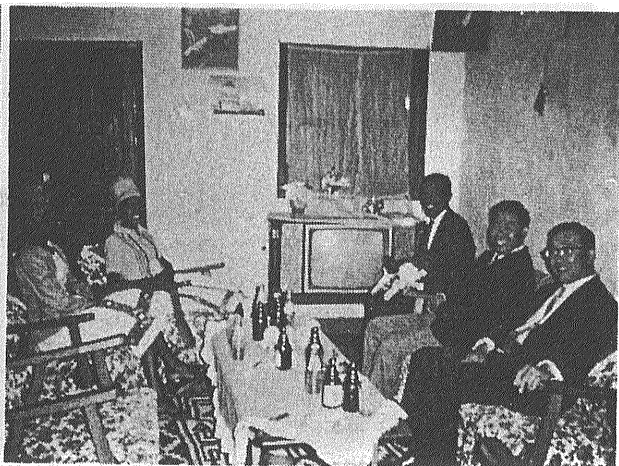


図8 水資源庁の作井主任カサーン氏は 大の日本びいきである。 彼の家にはナショナル製のテレビがある

ま話しが終わるまで待っていたり てくてくとわが家へ帰っていく。ドンキーは 動けなくなると道端にすてられる。それを有難くご馳走になるのが ハイエナである。ハイエナは犬に似ていて 前足が長く ジャングルの清掃人といわれるほどに食欲である。彼らは夜行性の動物で 死んだ動物をきれいに掃除する。ある夕方 道のほとりで腹のふくれ上がったドンキーの死体をみたが 翌朝には胴から後が消えており 次の朝には影も形もみあたらなかった。ときどき夢中になって 車にひかれることがあるらしい。その整理は野犬がするという。ハラールの町では 町の観光にハイエナを飼っているようだ。食事中に自動車事故にあうのは ハイエナだけではない。昼間には 獲物をめがけて ハゲタカが舞いおりてくる。そのハゲタカが獲物に熱中してハイウエイを猛スピードで走りぬける車のギセイになっていたのは ときどき見かけた。

アムハラ族の都であるアジス アババは アムハラ語で美しい花という意味である。私たちが訪れたときは雨季明けであったから 花がいっせいに咲いていた。ブーゲンビリア カンナ カラー パラ コスモス ナデシコ ベゴニア アヤメ——など原色そのままの美しさは 首都の名にふさわしかった。その町で 水曜日と土曜日に 市場が開かれる。朝早くからあるいは前日の日から牛や山羊が土けむりをたてながら集まり また薪 ニワトリ 穀物 タマゴ 油などを持った男女が町に向かって集まってくる。午前中は こうした農民たちの行列で町はうまり 午後になると町からそれぞれの部落へ散っていく人達の列がつづく。週二回の市場は首都以外の町や村でも開かれる。市場での取り引きは



図10 アジス アババの町を行くドンキー

多くの場合 物々交換である。もうけた男たちは 町はずれにあるバーで夜おそくまで酒を楽しんでいる。そして 三三五五 ハイエナが活躍する夜の街道を 護身用の長い杖をもって わが家へと急ぐ。

アジス アババには近代的なビルやホテルが建ち並んでいた。第1回の調査団が驚くほどの建築ブームであった。このビル街を走る黄褐色のバスの車体には 日本の自動車タイヤの商品名が大きくついていた。トヨタのジープも国連や官庁のマークをつけて 走っていた。店に入ると カメラやテープレコーダーの類はもちろんのこと 文房具にも日本製品が並んでいた。

この町を訪れる日本人になつかしいのは ハイレ シラシエ1世の宮殿のすぐ近くにある 国営の温泉で ゆったりした湯舟 豊富な湯量は まことにうらやましい。これは かつて秋田大学の近藤忠三博士が 皇帝の招へいによってこの国を訪れ 調査されたもので 井戸の深度は420m 泉温は72℃のアルカリ泉である。ホテルの上には この湯をうめる水を作るために温泉水を冷却するクーリングタワーがあって 白い湯気が青い空に吸いこまれていた。

(筆者は 応用地質部)

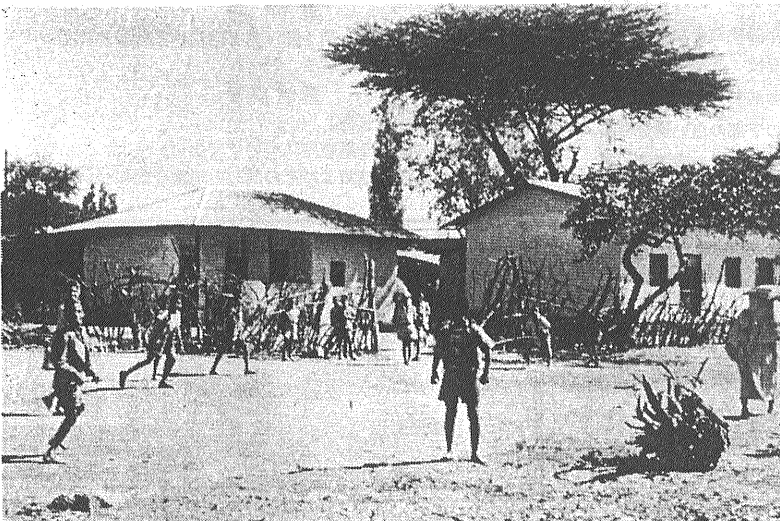


図9 ナザレスの町にある小学校と生徒たち。グラウンドで授業中 写真機を向けたら逃げ出した。この国では 相手の承諾をえなければ 写真をとってはならない